



みどりの風

平成25年6月4日発行
校報 第498号
〔みどりの風 第41号〕
練馬区立関町北小学校

たった一つの命だから

校長 大野 泰弘

先日の運動会には、早朝より多くの保護者、ご家族、そしてご来賓の皆様にご来校いただき、子どもたちの演技、競技、係活動等に温かいご声援を賜りました。あらためて厚く御礼を申し上げます。運動会日和に恵まれ、子どもたち一人一人、それまでの練習の成果を存分に発揮し、一人一人の表情はととも輝いていました。各学年における、それまでの努力の日々と当日のひたむきさが重なり、深い感動と喜びを得ました。「情熱と絆を心に ベストをつくせ」というスローガンのように、子どもたちもそれを応援する大人も、互いの心の絆が深まり、一体感が感じられた一日でした。

さて、福岡県筑後市を発祥とする「ワンライフプロジェクト」という団体があります。文字通り、「一つの命」を扱う活動をしている団体です。

私は、旧知の方の紹介で、今年3月に、ワンライフプロジェクト東京支部が主催する「朗読会」に参加いたしました。ちょうどそこに、このプロジェクトを立ち上げた富田優子さんという女性がいらっしや、設立の経緯を話されていました。概要は以下のとおりです。

私の子どもたちは、元気に学校に行き、まあまあ平凡な日々を送っていました。あの日、「足が痛い」と言う息子を連れて、整形外科へ行くまでは。

診察後、レントゲン写真に太腿の骨なのに大きく黒い卵のようなものが写っていました。それは所謂、腫瘍でした。そして、これが、私たち家族の病気との闘いの幕開けとなりました。

「転ぶな・足を打つな・走るな」、「腫瘍の部位を骨折したら、すぐに左足を切断することになる」いくつもの注意を受けた11歳の息子は、すんなり事態の重大さを理解しました。

目の前が真っ暗になった私をはじめ、家族はパニック状態。生きた心地がしませんでした。それから手術を受け、スポーツという一番好きなことを禁止され、周りの注意にもうざりした日々を送った息子。感情を上手にコントロールできない日もあったでしょう。でも、完治するまでの4年間、私は息子の愚痴を一度も聞いたことがありませんでした。

息子を支えてくれた友達みんな、ありがとう。毎日、外で遊べない息子に合わせて教室で遊んでくれましたね。必ず誰かがそばにいてくれました。ありがとう。

病気が見付かってから、たくさん泣いたり悩んだりしましたが、決して悪いことばかりではありませんでした。周りの人たちがいてこそ、私が存在していることを知ったし、何よりもたくさんの人と出会えました。私一人では倒れていました。私を支えてくださった皆さん、ありがとう。すべての方に感謝しています。

私たちは、次男の4年間の闘病生活を通して、「たった一つの命」を見つめ直すことの大切さを教わりました。

次男の病気が完治した翌日、知り合いから次男より一つ年下の女の子の年賀状を見せてもらいました。それは、その子が病気で右腕を失った後、残された左手で『たった一つの命だから』と力強く書いた年賀状でした。

それから、私とそこご家族との交流が始まって、全国各地で「たった一つの命だから」というメッセージを伝えていくことになったのです。

6月は読書月間ですが、ふれあい月間でもあります。子どもたちがご両親やご家族から与えられた「たった一つの命」のすばらしさやその重みを感じ、「自らの人生を如何に生きるべきか」という大きなテーマについても考えてみることは、とても価値のあることだと思います。自分の命や生き方を大切にできれば、周りの人の命、生き方も尊重でき、運動会のテーマにもあった「絆」を一層深めることができるでしょう。

本校では、6月に「ワンライフプロジェクト東京支部」の支部長 北原佐和子 様にお越しいただき、「たった一つの命だから」をテーマにした『命のメッセージ朗読会』を3年生以上を対象に開催することにいたしました。全国各地から集められた命に関するメッセージを心に刻み、自分にとっての命について、考えを深めてもらいたいと思っています。

なお、保護者の皆様には、先になります。11月9日(土)の道徳授業地区公開講座で、保護者向けの朗読会を開くことにしています。親子で命について考えてみる一助にさせていただきますと有難く存じます。